

平和学習 ～家族と地域を学びの場として～

氏名 藤崎潤

所属 兵庫県遺族会青年部副部長兼事務局長

1. 地域での平和学習

戦争とは、仲間や家族、国を思う人々の魂を、無残にも引き離し奪う、忌むべきものです。戦時下における普遍的な日本人、70年以上経ても変わらぬ家族のありようを、親子、家族、地域住民と、其々の間の『絆』を通して、戦争によって無残にも奪われた命の尊さを学ぶ事を念頭にしています。

まず個々の『家族』を知る事から、戦争をより身近なものとして捉え、そこから地域という、広い視野で考える機会となるような平和学習を展開出来るよう、地域学習をベースに学習内容を構築しています。

また、現代の価値観だけで歴史を見るのではなく、当時の歴史的背景や事実、立場等、価値観、国際関係、あらゆる視点から多角的に、冷静に見る必要があると考えています。

2. 学校現場：学内授業

現在多くの自治体にて小学校6年生の社会科授業において、初めて先の大戦について教わる。中学校において扱われるのは、2年生の後半か3年生の始めとなっており、中小学校の内容の濃さの差異はあるが、授業内容は、年代・主な人物・事象と、大戦のあらましをなぞったものに留めてあります。

3. 学校現場：課外学習

学校や地域によって大きく異なるが、広島原爆ドームや平和記念資料館に代表されるような、戦争史博物館を訪れる。神戸市は神戸大空襲、三田市は三輪のグラマン襲撃といったような、一部地域性も取り入れた授業も行われている。

4. 平和学習の課題

戦争の悲惨さ、例えば原爆投下が広島市民に襲い掛かった惨状や、神戸空襲による死者数等といった、『大きな単位での戦争の悲惨さ』に触れることはあっても、大戦を乗り越えた自分達の祖父母達『身近な家族』の息遣いがほぼ感じられない。

特にそれは、受け手である学生にとって、悲惨ではあったが、モノクロの遠い遠い時代

としてしか認識されず、現実味をほぼ感じられないが故に、戦争について身近な出来事としてどうしても捉えにくい。

①教育の場

- ・教育現場の先生が戦後世代
- ・知識偏重（受験の為の学習）
- ・戦争を取り扱う事のタブー化

②社会的環境

- ・日本は先の大戦以降、戦争に巻き込まれておらず、具体的に考えてこなかった。

③歳月の経過

- ・76年もの歳月が記憶を希薄化させる。

④家族の変容

- ・自分達の家系や地域について、家庭内で考え知る機会が無くなった（核家族化）。

5. 家族と地域から

ベースとなるのは、個々の家族、自分たちの祖父母達について考え学ぶ事が最も重要と考えます。先の大戦は、遺族かどうかという事は関係なく、全ての日本国民を巻き込んだ戦禍となりました。その上で、自らの家族について振り返る事で、戦争をより身近な事象として捉える事が出来、更に自分たちの地域であった出来事を学習する。そういった広域性を持つ様な、戦争について学べる機会と場を作る事が重要であると考えます。

6. 多様な視点で、座学とフィールドワーク

地域において過去数年に渡って多様な活動を展開してきましたが、既存の平和学習にみられる様な、先の大戦に関する基本知識的な座学だけではなく、他分野横断的に、地域でのフィールドワークをはじめ、オンラインツアーや映画鑑賞等、多様な視点を通じて戦争について学ぶ機会を展開していく。

県内400基以上もの慰霊碑が建立され、加西市の鶴野飛行場、淡路市の由良要塞跡や戦没学徒慰霊碑の若人広場、御影公会堂及び映画火垂るの墓の舞台となった西ノ宮夙川沿線等々、現存する戦争史跡が兵庫県内にはあり、学習の場として大いに活用し、地域学習の促進と、フィールドワークの場としてより平和学習を展開していく。